

他者を理解する

「瞳がお綺麗ですね。」

本校の教員が元バレーボールアメリカナショナルチーム代表ヨーコ・ゼッターランドさんにかけた言葉です。

5日にヨーコ・ゼッターランドさんを講師にお迎えして、「他者を理解し共に成長する」と題して、いじめ・人権・差別について考えました。

彼女は、アメリカ・カリフォルニア州でスウェーデン系アメリカ人のお父様と日本人のお母様のもとにお生まれになりました。6歳の時に、お母様と日本での生活がスタートしました。公立の小学校に通うと、周りから、瞳の色の事・髪の毛の色の事・肌の色の事・そして外国人と揶揄されました。「やめて」と言いたいけれど、日本語を上手く操れない。

彼女はいつも「Who am I?」とご自身に語り掛けていたそうです。そんな思いを母親に共感してもらいたく「外国人と言われた。アメリカに帰りたい」と懇願します。母は「私だってアメリカに行けば外国人よ」と一蹴。同情のひとつもありません。周りの言葉に「傷ついた」と訴えると、母は「あなただって知らないうちに人を傷つけているかもしれないのよ」一貫した、母の態度は、娘であるゼッターランドさんに乗り越える力をつけていきました。そして、他人の責任にする前に自分を振り替える姿勢を芽生えさせていきました。



《ゼッターランドさん》 中学から本格的にバレーボールをはじめ、その能力はすぐに中学校日本一という形で現れます。私立中村高校に進学。国体で優勝、春高やインターハイでは3位に。多数の実業団からオファー。しかし、関東大学リーグ6部の早稲田大学に進学します。競技者として引退した後の指導者への道を考えて動いたのです。セッターにアタッカーにフル回転の活躍。2部昇格を果たしたのですが、当時の日本バレーボール界は、トッププレーヤーになるには実業団や強いチームに入るべきという考えが主流でした。当然、アスリートのセカンドキャリアへの理解は進んでいません。したがって、大学卒業後の実業団バレーへの道が閉ざされてしまいました。フジテレビに入社が内定。しかし、オリンピック出場を目指す強い思いが彼女を動かし、渡米（帰米）。アメリカ国籍を選択し、アメリカナショナルチームのトライアウトを受け、見事合格。自らオリンピックへの道を切り開いたのです。2大会のオリンピック出場、アメリカナショナルチームで7年間の活動の後、日本のバレーボールリーグに参加。ダイエーオレンジアタッカーズを黒鷲杯2連覇に導くなど活躍。またも苦難が。「日本人選手を育てるため」と国籍の壁で引退を余儀なくされます。バレーボールへの想いは留まらず、大学院を受験と動きます。2年後には修士課程を修了。嘉悦大学女子バレーボール部監督、そして日本女子体育大学のバレーボール部副部長並びに准教授を歴任します。

そこで終わらず動き続けるのがゼッターランドさん。准教授をやめ退路を断ち、アメリカプロバレーボールリーグ所属の、「アトランタ」のコーチとして現在活躍、挑戦し続けているのです。

講演に散りばめられていた、ゼッターランドさんのチームへの想いは、人への想いです。「協力しないと1点は取れない。自分の上げたトスをいい形で表現してくれる仲間がいるからこそ。」一人で生きていくことはできません。「悪いボールが届いてもいいボールに変えてアタッカーに届ける。同様に、いやなことを言われても、素敵な言葉に変えて次の人に届けば、やがていやなことを言った人にも分かる時が来る。みんなで幸せになる時が。」負の連鎖は、自分が断ち切れればいい。

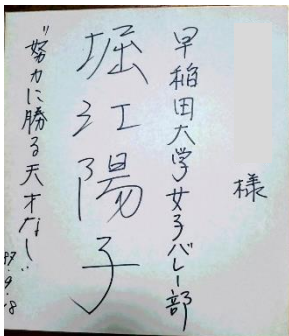
「自分の考えだけではない。相手の考えがある中でどうしたらうまくやっていけるのかを模索する。」経歴だけをお聴きすれば、日本バレーボール界に対して背を向けても良いはずなのに、この言葉に大切に

てくださっている理由を知りました。

講演の結びに、ご自身の出場したアトランタ五輪の新聞記事を紹介してくださいました。日本との闘いで、0-9からアメリカの逆転劇を報じた見出しは『“溶け合うチーム”、勝利を引き出す』とありました。「コートに立っていたアメリカを象徴する多人種メンバーを称賛する表現が勝利以上にうれしかった」と。

大学時代の色紙には“努力に勝る天才はなし”と書かれています。自身の進化を求めて挑戦のために動く力は、この頃すでに培われていたのだと感じます。

ゼッターランドさんは“動力が勝る天才”です。「瞳がお綺麗」なのは、ゼッターランドさんの突き進んできた過去と前を向き動き続ける未来が溶け合って映し出しているからであると確信しました。



本校、給食調理士チーフが、かつていただいたサイン。